

血食に関する民俗学的考察 — 祭儀と日常での血食の特徴と変化 —

李 徳雨[※]

A Folkloric Study of Blood Eating

: Characteristic and Transformation of Blood Eating in Ritual and Ordinary Diet

Blood in literatures is often considered not only to be a very sacred thing but also to represent the negativity. Especially, blood acquired from rituals was used as a negation and often as a sacrifice. This paper pays attention to the fact that blood, with both sides of positive and negative meanings, is being used as food like Seonjiguk (soup made of clotted blood of cattle), and examined how blood could approach people as food.

This research considers blood of animals used to sacrifice or to eat as Blood eating, and examines the relationship between blood eaten after sacrificed to a ritual and blood as ordinary food for human beings.

The previous researches of Blood eating have been regarded as the studies for meat food. However, blood and meat are definitely separated in usage in the process of dissecting an animal. New approach of Blood eating as ordinary diet as an independent research is meaningful.

Blood used in ritualism was a sacrifice to gods, shamanism, and village religious belief. Blood and fur of cattle were sacrificed to gods, and in Pyeongsan, Hwanghae-do Province, an ox was regarded to exorcise. Also, in Hwangdo and Chungyang, blood was used as a sacrifice.

Blood as ordinary diet and sacrifice in rituals are classified into two: taking blood by itself and cooking blood. Taking blood by itself means just drinking real blood and cooking blood is to make a dish with blood such as soup made of clotted blood of cattle, pig intestine, and Ga-Rit soup.

The characteristic of Blood eating in ritualism and ordinary diet is represented by sacrifice and eating together. Sacrifice means providing blood as sacrifice in rituals and the blood is obtained from an animal. And eating is represented by using food after the rituals.

Blood eating has been changed from ritualism to ordinary diet and it is well related to the following changes. The first change is in the method of slaughtering. Animals were taken to a holy place and blood gathering was made in traditional rituals. However, in today's ordinary diet, animals are slaughtered in a large quantity. The second change is in ingredients and cooking. The simple ingredients and cooking after the rituals were transformed into the function of relieving a hangover and many ingredients were intro-

※ 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

duced. Third, another change is in the type of eating. In the past, eating was done by gods and human beings, which has been changed to the type that only humans eat it.

Therefore, Blood eating has been transformed from the ritualism to ordinary diet and this process is a transformation of drinking real blood to ordinary food and finally ordinary food being cooked with new ingredients. And this transformation finally relates with the meaning of blood. Sacred Blood eating in ritualism has been transformed into the meaning of new ingredients of foods introduced today.

Key words : Blood eating (血食), Ritual (儀礼), Ordinary diet (日常食), Eating together (共食), Sacrifice (供犠)

—目次—

1. はじめに
2. 先行研究の検討や研究対象と方法
3. 祭儀における血食
4. 日常における血食
5. 祭儀と日常における血食の特徴と変化
6. おわりに

1. はじめに

「血」とは動物体¹の体内を回って栄養物と酸素を供給する赤い液体である。この血は色々な意味を持っているが、まず身体の一部として、生命を維持する生物学上の意味として私たちの体の中の血がある。たとえば韓国のことわざで「血は水より濃い」という表現がある。これは血が血縁関係を意味すると言うことである。また、「血気旺盛」という言葉が示すように血が若者を意味する場合もある。一方、血は肯定的な意味のほかにも否定的な意味で使われたりもする。「血戦」という戦争の残酷さの意味で死を象徴し、ホラー映画に登場する場合は血によって恐怖を増幅させる要素として作用することもある。また、韓国で「血を見た」という表現は、日常生活で不吉な事をした際に使われている。このような否定的な血の意味を韓国民俗学では、女性に対する不浄観をダルゴリ (달고기: 女性の生理を示すハンゲル) に起因するものと解釈することもある²。ところが、近年では「血」に新たな意味が現れている。具体的には血液型でそれぞれのグループを形成し、それによって人の性格を区別して見る習慣³で、これは人間の性格が血から規定されると信じられており、現代の新しい民俗の俗信現象と見ることができる。

このような血の色々な意味は人間にだけ現れるのではなく、動物の血にも見られる。屠殺後、血を供物に上げる事例もあれば、雨乞いの際に、動物の血を散らして雨を降らせる事もあり、体を保身するために動物の血と焼酎を混ぜて飲む事もある。他にも疫病が発生したときに血をかけたり、動物の血を調理して料理を作って食べる事もある。この場合、動物の血を供物の血、

否定的な血、保養食としての血、厄除けの意味としての血、食べ物としての血などと区別することができる。このような動物の血が多様に使われる事例は、血を象徴している意味がそれぞれあるためと考えられる。つまり、動物の血は否定を象徴して汚れたものと見なされたり、時にはその不正を防ぐための厄除けとして象徴されるのである。これらのように両義性を持っている動物の血を食用化するというのは、別の意味を付与することにもなる。ところで「動物の血を食べる」というのは一見野蛮に見られるが、韓国で動物の生の血を飲んだり、血を調理してソンジグック（선짓국）やスンデ（순대）などの食べ物を庶民食としてよく食べるのを見ると、それほど不快な食べ物とは見られない。

ここで疑問に思うのは、「なぜ血を生け贅に利用して、生の血を飲み、血を調理して、食べ物として食べるのか」また、「祭儀で使われる血を食品化⁴する過程での血はどのような意味を持っているか」ということである。これらの疑問点から出発した本研究は、血を生け贅に使うことおよび血を食べる行為における血食の特徴とその変化を考えてみたい。つまり、日常食として血食のソンジグックやスンデが全国的に普及しているが、これらの慣行は、儀礼的に使用されて血を伴った物とどのような関係があるかについて、本稿では、具体的に祭儀における血食と日常における血食の様々な事例を通じてその特徴と変化を見て、血食の新たな意味を模索することを目的とする。

祭儀と日常で使われる血について、本研究では「血食」という概念を使う。この血食⁵は犠牲を捧げて祭祀を行なうという意味と⁶、文字通り「血の食べ物」、「血を食べる」という意味で使用する。

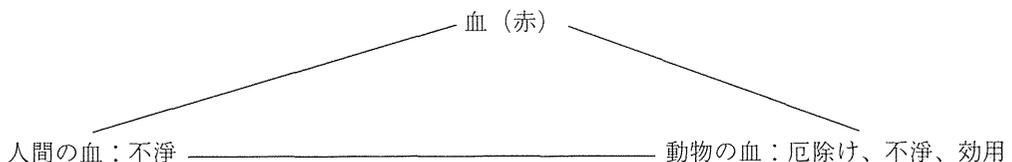
2. 先行研究の検討と研究対象、方法

以下では血食の先行研究について、血と食に分けて考察する。本章では、民俗学の「血」に関する研究、食生活における血食の研究を検討した後、研究方法を提示する。

1) 先行研究の検討

従来の韓国民俗学における血の先行研究では様々な事例が提示されてきたが、これらを区分してみると次のように整理することができる。

第一は干ばつのとき降水を祈願する雨乞い（祈雨祭）で用いられる血⁷の事例、第二は祭儀のタブー（taboo）としての女性の血の事例⁸、第三は厄除けの機能としての赤い色の血の事例⁹、最後に血の効用性に関する事例¹⁰である。これを図式化すると、次のとおりになる。



<表1>韓国民俗学における血に関する研究

このような血に関する研究は、民俗学では信仰の中の不浄や厄除けの意味で用いられたのみで、個別的な素材として議論されることはあまりなかった。これは血が独立の素材として研究されずに、「血=不浄」、血の色の「赤=厄除け」という構造で理解され、民間信仰の研究に含まれて部分的に提示されたためである。

しかし動物の血が雨乞いの不浄や赤で厄除けの意味のほかにも供物として用いられたり、食物として用いられたりすることについては、ほとんど報告されていない。そのため、本研究ではこれらの点に着目し、動物の血をテーマに血食の特徴とその変化の様相を通して新たな「血」の意味を解釈しようとするものである。

韓国民俗学において、食生活に関する研究は他の分野に比べて活発に行われてはいなかった。これは民俗学のカテゴリーで、他の分野の研究成果と食生活の研究成果を比較してみると理解ができる。また食生活の研究は主に食品栄養学者によって研究されてきた。これは文化史的アプローチ、栄養学的アプローチ、社会史のアプローチに分類することができる。民俗学の研究分野に食生活が含まれているのはもちろんである。しかし韓国民俗学において食の研究が比較的少ない理由について、周永河は自省しながら次のように述べた事がある。

「食生活は、私たちの生活にとっても重要であるため、誰でも知っていると思っしまい、食べ物を単に生物学的な領域で本能的かつ栄養的なものとみなしたり、食糧を私的領域として認識したりするためである¹¹⁾。」

その結果、民俗学だけでなく、人類学やその他の社会学者は食生活の研究をおろそかにしてしまうことになった。これらの問題について張哲秀は、民俗学の全面的な研究成果における食に関する研究成果について、「既存の文献資料の整理を活用して、より高度な解釈が行われなければならない¹²⁾」とし、民俗学の立場からの食に関する研究の必要性を指摘した。

一方、血食に関する先行研究の一般的な傾向は、肉食史を介したものが主な研究対象であった。韓国の肉食は仏教の影響に加え、農耕社会の環境などにより、それほど盛んには行われていなかった。また、牛の労働力としての利用のために政策として農牛の保存のための禁殺都監¹³⁾が設置されたことで肉食の衰退が加速した。

こうした韓国の肉食史に対し、食品栄養学者の李盛雨は既存の肉食文化が仏教の受容と殺生禁止政策により中断された後、『居家必用』や『高麗史』を例にあげて、中国の元朝によって肉食文化が復活したと主張した。つまり、肉食が元の影響で導入されたとする論理である。この点に関して任章赫は『居家必用』は著者未詳で元代の本のため、モンゴルの影響のみとの主張には多少無理があり、またモンゴルと韓国の湯の調理法や屠殺法の違いがあることなどから、一般的な元代の肉食慣行として見るのは難しいと指摘した¹⁴⁾。

このように血食に関する先行研究は肉食史の研究の一部として扱われてきた。その理由は、単に血と肉を分けて考えておらず、肉食の一部として血食を盛り込んでいたからである。この問題は、血の文化的、象徴的な意味を看過したと見られる。また、動物の屠殺過程をみると、その問題に対する答えを見出す事ができる。「屠殺→防血→解体（肉、骨、内臓）」の過程で、

血と肉は明確に分離されて処理されている。このように血と肉の分離過程で肉食に使用する肉と血食ができる血は分けられている。また分離した血は屠殺後、一番はじめに得られるものであり、肉と血は異なるとの理解が必要である。

この点を踏まえて、本研究では血食を肉食の一部ではなく、独自の研究対象として捉える必要性があると考ええる。

2) 研究対象と方法

本研究では、祭儀と日常で現れる血食の事例を中心に、その特徴と変化の過程を考えてみたい。すなわち、私たちの食卓に上がる血の食べ物がどのように日常化されたかについて、祭儀と日常での血食体系¹⁵を比較することにより、これらの事例が相互に密接な関係をもつと仮定し、血が食品化するまでの過程を類推して、どのようなプロセスの中で進行されているのかを祭儀と日常における血食事例を通してその特徴をみる。そのために、既存の文献や現地調査を通じて得られた口述資料をもとに議論を進めることにする。

3. 祭儀における血食

祭儀は祭祀を執り行なう儀礼で、信仰を可視化した実践的な呪術行為であり、象徴的な表現体系¹⁶である。これらの祭儀を介して人々は神々を楽しませるために、丁寧に供物（祭物）を用意して並べ、所紙（願いことを書いた紙）を介して神様に祈る。

一般的に祭儀に上がる供物は神と願う人たちとの関係が表れる重要なもので、主に食物が捧げられる。また、神への食物を意味する供物は日常的なものではなく、丹精込めて準備されるものであるだけに、特別なものでなければならない。これは、過去牛肉や豚肉のような肉食をすることが困難なときにも肉は必ず上げられてきたことを見れば分かる。このように、供物は誠意と努力が含まれているものと供物をどのように準備を行ったかによって、彼らの祈りが神に届くかを決定する重要な要素と考えることができる。

祭儀は、準備する主体に応じて国家祭儀と民間祭儀とに分けられる。本章では、国家祭儀の一つである社稷大祭と民間祭儀としての巫俗（シャーマニズム）、洞祭（ムラで行う祭儀）を中心に血食の事例を通して血が捧げられる理由と意味を調べるものとする。

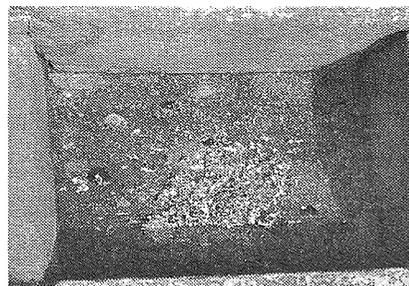
1) 社稷大祭における血食

社稷大祭は、土地を管理する社神と農作物の豊作を左右する穀物の神様の稷神にする祭儀で、王が直接祭壇に上って執り行う朝鮮時代の宮中祭祀の中で最も大きな祭祀である。重要無形文化財の111号に指定された社稷大祭は、元は定時祭¹⁷と臨時祭¹⁸に分けて行われていたが、現在では毎年9月の最初の週の日曜日に社稷壇で祭祀を執り行なっている¹⁹。また、社稷大祭は、儒教を国家の宗教とした朝鮮時代の王室の祖先神へ捧げる宗廟祭礼（重要無形文化財56号）と一緒に国泰民安を祈願する重要な儀礼であった。

社稷大祭は迎神礼→奠幣礼→薦俎礼→初獻礼→亞獻礼→終獻礼→飲福礼→送神礼→望燎礼の順で行う。この中で血食は迎神礼でみられる。迎神礼は、神を迎える社稷大祭の最初の儀礼である。この時、<写真1>にみられるように毛血盤（モヒョルバン）という動物の血と毛を盤に入れ、祭儀を行う前に上げて、くぼみに毛血盤を置く<写真2>。このように社稷祭の毛血盤を通じて血食が現れるのであり、毛血盤は祭儀の開始を知らせるものである。



<写真 1> 社稷祭の毛血盤²⁰



<写真 2> くぼみの毛血²¹

国家祭儀にあって、その始まりとして血を生け贄に使用する毛血盤は重要な意味を持っている。まず、毛血盤の血は牛の血で、このときに使われる牛は普通の牛ではない。過去には3回の検査の末に健康で交尾をしていないオスの牛を典祀庁（ジンサチョン）で屠殺し、現在の城南モラン市場では年齢、毛、顔などを考慮し、慎重に良い牛を選ぶ。このように良い牛から得られた血は屠殺の過程で最初に得られるもので一番新鮮なものであり、これを生け贄に上げることは神聖な意味が付与されることになる。また、くぼみの中に「毛血（モヒョル）」を埋めることで地神への供犠になる。このように祭物に使われた血はくぼみに埋められて神の血食が行われる。そして、祭儀が終わった後、毛血盤に使われた血のほかに、残りの血をソンジグックを煮込んで祭儀に参加した人々が食べる²²。

2) 巫俗（シャーマニズム）における血食 ; 黄海道の平山ソノルムグッ

巫俗でも血食が現れる。そのような意識のうちの一つが黄海道平山の地域で行われるソノルムグッである。このグッは農業や事業、商売などの繁栄を祈ったり、子孫の繁栄を祈ったりする意味で行われる豊作儀礼的な性格のグッ²³で、その構成は「안방고사（アンバンゴサ）→신청울림（シンチョンウルリン）→상산맛이（サンサンマジ）→초감응거（チョガムンゴリ）→칠성거리（チルソンゴリ）→제석거리（ゼソクゴリ）→작두거리（ザクテウゴリ）→사냥거리（サニャンゴリ）→타살거리（タサルゴリ）→대감거리（デガムゴリ）→조상거리（ジョサンゴリ）→터주거리（トジュゴリ）→마당거리（マダンゴリ）」の順²⁴になっている。

平山ソノルムグッで血食は、사냥거리（サニャンゴリ：狩り）の中に現れる。サニャンゴリは神への供物として捧げられる牛、豚、鶏を捕まえるために「サンサンマクデウンイ」と「ギョンガンマンシン（神）」が弓、矢、三叉の槍、刀を持ってタカ打令を歌いながら狩りに行く。

サニャンゴリでは群雄を癒やす「群雄グッ（グンウングッ）」の最中に巫女が血を流して死んだ多くの群雄を慰めてもてなすために、豚をなだめて群雄帯の血を吸って食べる。これは群雄を慰めるために血を食べるもので、ここでは動物の生き血が使われる。生き血を食べる行為は巫女自身が神になり、神が食べるようにする模擬的な行為であり、神の靈験さを象徴的に表現することである。



〈写真 3〉 黄海道の平山ソノルウムグッにおける群雄グッ²⁵

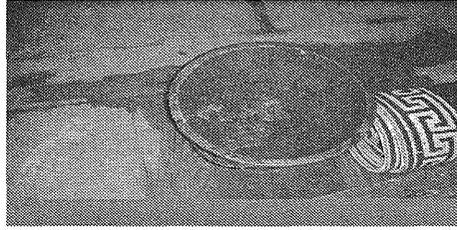
上の写真のように巫女が血を食べる行為は神が血食する姿を巫女が神格化するものである。巫俗で血食は平山ソノルウムグッでのみ行われるものではない。黄海道グッでは巫女が血を食べる場面がしばしば登場するが、ここにはソノルウムグッと同様に血を巫女が食べることにより、群雄を癒してくれる意味が込められている。

3) 洞祭における血食

洞祭（ドンゼ）はムラの単位で行われる信仰の儀礼的な形式であり²⁶、ムラの住民たちの共同体的な収結体である。ムラの人々が生活する共同のスペースを守ってくれると信じて神にムラの人々は生氣福德を計算してきれいな人を祭官（ゼガン）に選出し、祭日に合わせて神聖な供物を用意して祭儀を行う。これらの洞祭はムラの住民たちの願いと真心のこもった礼儀で、生業や自然環境によって、豊漁祭、山神祭、城隍祭などとして現れる。洞祭でも供物を使った血食の事例がみられるが、ここでは黄島鵬旗豊漁祭と青陽の山神祭を中心に血食に関する事例をみる。

(1) 黄島鵬旗豊漁祭（ファンドブンギブンオゼ）

黄島鵬旗豊漁祭は他の洞祭と同様に、ムラの安寧と豊漁を祈願する意味で毎年旧暦の正月の二日から三日まで行われる。この時生け贅に牛が使われるが、ここで牛が使われることは重要な意味を持つ。牛を生け贅に使うことは他の動物に比べて最も貴重なものである。その理由は牛が持っている力だけではなく、他の動物よりも体が大きいためである。このような理由で黄島で牛と呼ばず、「ジテ」または「祭物」と呼んでいる。



〈写真 4〉 黄島鵬旗豊漁祭で使用された血

黄島では本祭を執り行なう前に、堂主（ダンジュ：祭儀の責任者）が牛をきれいに入浴させた後牛を連れて山に登る。そしてきれいなムラの人々を選定して牛を屠殺する。屠殺する過程では、牛の首を取ってバケツをあてて血を採っておく〈写真4〉。血を受けた後、牛を解体するために血を含め、12の部位²⁷に分けて「血告祀（ピゴサ）」を行っていく。このとき使用される血を含む副産物（肝臓、肺）は生で上げて、残りのもの（肉）は、焼いて上げる。血告祀で血を使う理由は、屠殺のとき牛から一番最初に得られるものが血で、この血は神聖なものと考えられているためである。

このように血告祀を行う理由は前述の社稷祭の毛血盤と場合に似ている。つまり本祭を行う前に屠殺した牛の血を中心に肉や副産物を先に神に捧げることと同じだと見られる。これは新鮮な血を神に捧げることは神へ神聖なものを捧げることで誠意を尽くす意味が込められているためである。

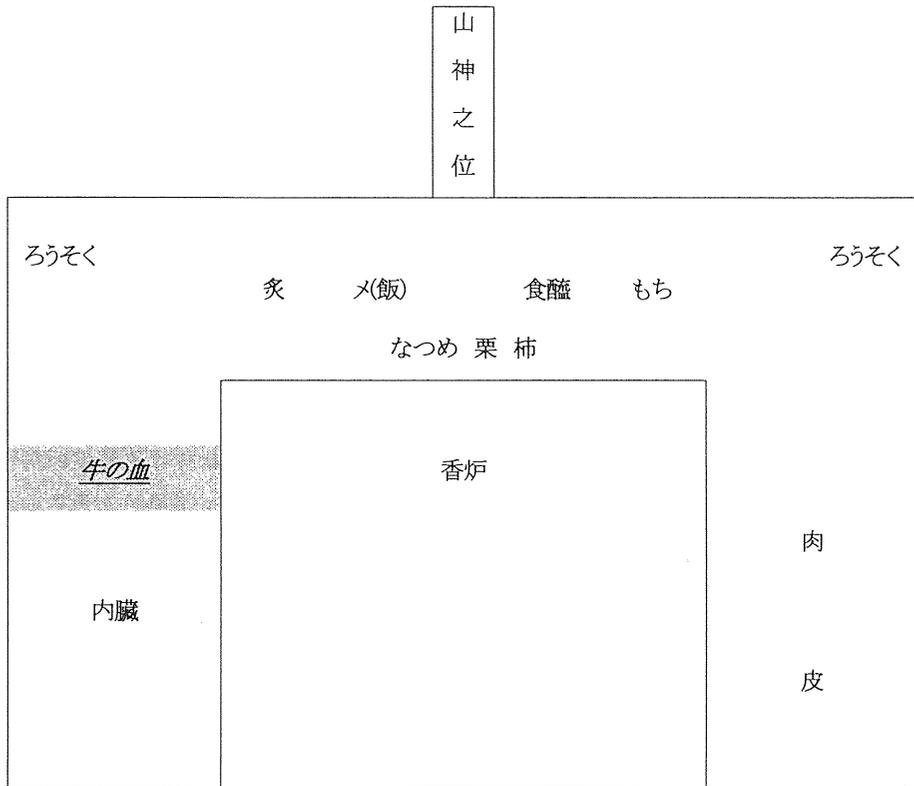
血告祀を行った後、祭儀に上がった血は捨てずにブロッケー一つ分を残し、それ以外の血はスープ（グック）にして祭儀に参加する人々が食べる。このスープは供物として捧げられる牛の骨を煮込んで血（ソンジ）を入れて作る²⁸。これは神が食した血を捨てず、祭儀に参加する人々が神の食べ物を共食するものと考えられる。

(2) 青陽の山神祭

山神祭はムラを守ってくれる守護神である山神にムラの安寧を祈願する祭儀である。青陽（チョンヤン）の山神祭（サンシンゼ）でも血を生け贄に上げるが、これは鵬旗豊漁祭と同様の面に現れる。以下は忠清南道の青陽の山神祭に現れる血食について、2005年の現地調査の内容である。

忠清南道の青陽郡雲谷面（ウンゴクミョン）のノルモクムラという所では山祭祀を毎年旧暦9月30日の0時に行う。このムラでは町内で生氣福德を計算して適合する3人を選抜し、その中で一番良い人を化主（ファジュ）に決めて、残りの人々を祭官（ゼガン）、祝官（チュクガン）として定める。この3人は3日間禁酒、禁煙、夫婦関係を禁じるなど、体をきれいにする。そして祭物は牛を使う。この牛を買うときには価格の掛け引きはせず、交尾していないオスで、祭儀3日前までに購入する。この牛は山神に捧げられる神聖な供物であり、祭儀日の朝に化主がこの牛を連れて山祭堂（サンジェダン）に行く。そして山祭堂の下に設けられた神聖な空間

で牛を屠殺する。そのプロセスは「採血→皮を剥ぐ→内蔵解体→肉の取り外し」の順に行う。牛を屠殺するときは血を残らずバケツに盛る。その量はバケツいっぱいぐらいになる。このように屠殺された牛は夜12時に祭儀が開始される前に祭壇に並べておく²⁹。



〈図 1〉ノルモク山神祭における供物の並べ方

上の〈図 1〉からは、ノルモクムラでは牛の血を生け贄として上げられていることが分かる。つまり屠殺、解体された後、採血して得られた血を捨てずに余すところなく上げるのは、血が動物の生命力を象徴するためである。

山神祭が完了したら、化主、祭官、祝官は祭物で使った血の一部を持ってソンジグックを食べ、他の祭物はそのまま置いてムラに帰ってくる。この点から、参加者たちが神にまず捧げられた供物のうち血を用いたソンジグックを食べることが重要であることがわかる。なぜなら血は神の気が残っているもので、他の物に比べて神聖なものだと考えられているためである。

そして翌日の朝に山祭堂に上がって行って、血を含めた他の祭物を持って降りてくる。そして化主の家で飲福（ウンボク：祭物を食べる）の準備をする。この場合もやはりソンジグックを煮込むが、作り方は一定量の水に内臓を沸かして、血（ソンジ）を入れて、ねぎ、にんにく、醤油だけを入れて食べる。このソンジグックは老若男女を問わず、ムラの人々皆が一緒に食べ

る。このソンジグックを皆で食べる理由は山神祭に上げられた物として血は神の靈験さが込められてと考え、神の気が残っている供物を食べると、その気を受け入れられると信じているためである³⁰。これは神が食べた祭物を人間が食べることで、神の保護を受け、人々は豊かさを約束され、ムラの住民はソンジグックを分けて食べることにより、コミュニティの結束力を高めることができる。この共食は集団のアイデンティティの強化、そして共同体建設の象徴的な経験のもと³¹として作用する。

このようなことは隣のムラのフドク里的のデドンムラでも見られる。このムラでは山神祭を行うときに供物として、豚を捕まえる。元々は牛を捕まえて上げたが、ムラの事情によって豚に変えた。この豚はムラの人々にみられない神聖な場所で屠殺して、血を用意する。そして血を含め他の物も全部持って山に登って山神祭を行い、それが終わったらムラの人々が集まってソンジグックを作って食べる³²。

このように祭儀において生け贄に使われる動物は、捧げ物として、動物を選ぶときから神聖なものでなければならない。これは、供物に使用される動物をむやみに選ばないことから分かるが、その動物の性別や姿、毛の色まで厳格に見てから捧げ物で使うからである。これは神へ最高の供物を捧げるという意味が内包されており、またこのように神に捧げる最高の祭物である神聖な動物の体内に回っている血は最も靈験さを持っていると信じているためである。

山神祭で血食が見られるのには民俗学的に重要な意味がある。その理由は山神祭が他の洞祭に比べてその形態がよく伝承されているといえる祭儀であるためである。祭儀に参加することができる人々はきれいな人に限られているという点と、外部の人々の祭儀参加が難しい点を考えると、山神祭は比較的伝承力が強いといえる。

このほかの地域でも血食に関する事例を見つけることができる。済州島（チェジュド）の山神ノリ（遊び）は、家庭で行われるグックに登場する狩りの演劇である。ここにはシンバン（巫女を示す済州島の方言）が狩人に扮して、山や野を歩き回りながら、キジ、鹿、イノシシなどの山の獣を捕る山神を接待することを再現するもので、済州の狩猟文化の要素が強く表出されている。これらのケースは彼らの山神観を調べることができるものであり、「済州島の山神ノリで山神に血を上げ、獲得したものを分肉して共食をする。」という報告³³がある。

このように神に捧げられる血の事例は他の国でも多く報告されている。生命の源である血は神の物であり、宗教的な比喩である。また権力の強化として、血が利用されており、宗教儀礼に使用され、贖罪の供物として捧げられる³⁴。

4. 日常における血食

1) 生き血食

生き血は防食したばかりの血でそのまま飲める液体である。生き血を食べることは生き血食（生血食：センヒョルシク）と呼ばれ、代表的な生き血食は鹿の血である。鹿の血は鹿茸を切る時に出てくるものである。許浚の『東醫寶鑑（ドンウィボンガン）』には、鹿の血に関する効

能として「鹿の血は腰痛、吐血、蜂癩、帯下を医する」とある。それを見ると、生き血は体を保養するために飲んでいるという。

鹿を育てているインフォーマント³⁵によると、鹿の血を飲むために、鹿を麻酔させ、鹿茸を切ると一杯ぐらいの鹿の血を得られるという。そしてこの血をお酒に混ぜて飲むが、その比率は1:3（血：お酒）ほどにして飲むという。

鹿の血の以外でも、生き血食は一部の人々の間で行われたことが、現地調査を通してわかる。たとえば、狩りとして、伏日に暑さを避けて、犬を川岸で食べていた。このとき犬を屠殺して得られる血を飲んだ³⁶という。

このように生き血食をする理由は保養食としての体の健康のために、また血の効果があると信じて元気が出ない時に血を飲むと血の元気が自分に取り入れられると信じているからである。つまり動物には血の命の気運が流れていて、命の幹を彼らが食べることによってその幹を自分たちが受けると考え、生き血食をしている³⁷。

2) 調理食として血食

食べ物は生で食べる場合もあるが、調理して食べるのが一般的である。前述の生き血食のほかに、韓国では血を調理して食べる場合がある。ここでいう調理とは材料を洗浄する・切る・つける・たれを入れる・盛るなどの過程をいう。このような調理方法は生き血食をしていない人々でも血を食べることができるようにするためのものである。ここではソンジヘジャングック、スンデ、ガリトググックを通じて、調理食として血食をみるものである。

(1) ソンジヘジャングック

ソンジ（鮮血）は主に牛や豚の血をいう。牛のソンジはソンジヘジャングックに、ブタソンジは主にスンデに利用する。ソンジヘジャングックはソンジで作ったグック（スープ）で、トジャングックのソンジを入れて煮込んだスープである。ソンジグックに解醒の機能を追加して作ったものがソンジヘジャングックである。これが韓国でいつから食べ始められたかははっきり分らないが³⁸、ソンジグックが文献に初めて登場したのは1924年に出版された『朝鮮無雙新式顆理製法』で、ソンジグックの「ウヒョルトン（牛血湯）」という名称、調理法、材料などが詳しく記録されている。

また1931年10月1日の東亜日報には、ソンジグックに関する記事がある。『料理（요리）』というタイトルでソンジグックは報道され、当時流行した食べ物を記事にしたものである。このときもうすでにソンジグックが存在し、ソンジを売ってた商人がいたほどソンジグックは庶民食として流行っていたことがわかる。記事が示すようにソンジグックのレシピやおいしく食べる方法が詳しく説明されているのを見ると、当時ソンジグックは普遍的な食べ物であったことがわかる。

一方、ソンジグックは先に明らかにしたように、近年はヘジャン（解臈）という言葉が加えられ、『ソンジヘジャングック』として知られている。ヘジャン（解臈）は「解醒」ともいわれ、

二日酔いを解消することを意味する。

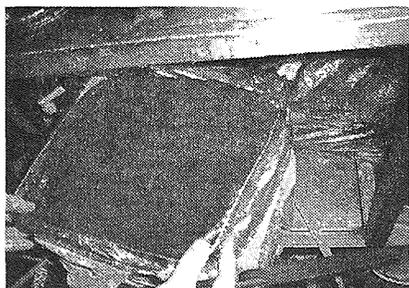
ソウルの食べ物の一つでもあるソンジヘジャングックの効能について、麻浦（マポ）で50年間ソンジヘジャングック店を運営してきたホン・スギョン（女、82歳）氏は次のような話をする。

「ソンジには、鉄分が多く入って母親や赤ちゃんもソンジを食べると良いです。なぜなら、母乳を飲む赤ちゃんは血が不足するんですよ。実は貧血にとっても良い食品なのに私たちが貧血の薬を飲めば、50%しか吸収されないと思います。ところが、ソンジは70%以上が吸収される。だからソンジヘジャングックはただの食べ物ではなく、補葉なのです。」

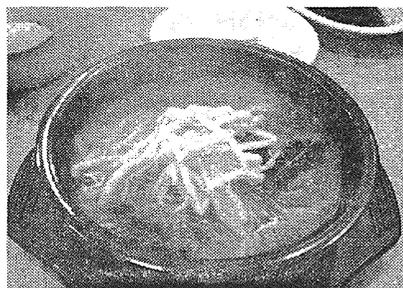
民間では母体や赤ちゃんにとって良いソンジは出産時に血をたくさん流した母親と子供たちのカルシウムや鉄分を補充し、その吸収率が他の薬と比べて高いため、保養食として機能したものと信じられている。また現在ソンジグックについて、次のように認識している。

「昔はこれがスルグック（酒スープ）で、朝にヘジャンするためにお年寄りの方々が召上りました。今は日常の食事ですよ。若い娘たちも食べておばさんたちも食べて。今は朝だけ食べるようなヘジャンではなく、食事の概念ができたと思いますよ³⁹。」

このように、ヘジャンとしての機能をしたソンジヘジャングックが最近、日常の食べ物として食べられている。これは食材の多様化と保養式の機能が一体となるソンジヘジャングックの意味が新たに定着したものとみられる。



〈写真5〉 ソンジヘジャングックを作る前のソンジ



〈写真6〉 ソンジヘジャングック

(2) スンデ

スンデは豚、牛、羊の内臓の中に豆腐、もやしナムル、ネギ、椎茸、肉などをつぶして味をつけたものを入れ、両端を縛って作る食べ物である。スンデに関して文献資料を調べてみると、『음식디미방（飲食ディ味方）』に犬の内臓で作ったスンデ、『酒方文』に牛の内臓にソンジを入れて煮込んだスンデ、『増補山林経済』、『曆酒方文』、『閩閩叢書』には牛の内臓に肉と色々な調味料を使ったスンデ⁴⁰に関する記録がある。スンデは主に京畿道、平安道、咸鏡道の地域で多く食べられてきた。

<スンデの作り方>

1. 豚の内臓を塩で洗って切る。

2. 粟を碾いて粉にし、豆腐は押しておく。もやしはゆでて切り刻む。豚ソンジと他の材料を味付けして、内臓に入れる。口を糸で結ぶ。
3. スンデと水を釜に入れ、弱火で煮る。
4. 完全に火の通ったスンデを薄く切ってグックに入れ、たれをつけて食べる⁴¹。

(3) ガリトグック

ソンジグック、スンデのほかに血を利用した料理にタンバン（湯飯）の一つの「가릿국（ガリトグック）」がある。今はあまり伝えられていないが、ガリトグックは春、秋、冬によく食べられた料理である。このガリトグックはソウルのタンバンと似ている。ソウルのタンバンはご飯に牛肉を切って入れ、牛肉スープを加えたものである。一方、ガリトグックはご飯にユッケのように切り刻まれた尻肉をのせて、ソンジと肉の引き裂かれたものと熱い肉汁を入れたものである⁴²。

5. 祭儀と日常における血食の特徴と変化

今まで祭儀と日常で現れる血食の様々な事例を調べてみた。このような事例には次のような特徴がある。祭儀の血食の事例からは、供物が血の動物の犠牲によって成り立つことがわかる。つまり祭儀は犠牲の過程で最初に得る血「供犠⁴³」を介して行われ、血は供物として新鮮な意味を持っている。社稷祭の毛血盤での牛の「供犠」、平山ソノルムグッでの動物の「供犠」、洞祭における牛・豚の「供犠」は血食に伴う条件であり、血食は供犠を通じてはじめて得られることである。また供犠による血食には「神人共食」の特徴がある。「神人共食」というのは神と人間と一緒に食べることで神に捧げられる供物は神が血食し、それらの供物を飲福を通じて人間が食べる。

このように血食は「供犠」と「共食」を介して現れ、これらの特徴は日常の血食にも同様に現れる。前述の日常における血食のソンジグックとスンデは血を利用した料理であり、動物の犠牲によって得られる。またソンジグックの場合は、グックという共食体系⁴⁴を介して一緒に食べる料理でもある。

このように祭儀と日常における血食に関する様々な事例でみられる共食と供犠という特徴からみると、祭儀の血食から日常の血食に変化したことがわかる。これらの変化は次のような要因と密接な関連があると考えられる。

第一は屠殺法の変化である。血食は屠殺後、採血された血を介して得るもので、祭儀で使用される血は祭堂付近の神聖な場所で屠殺して、その神聖性が維持される。またこのとき採血された血はすべてを捧げなければならないため、捨てずに残さずに用いられる。一方日常の食ではソンジを得るために、大規模な屠殺場で大量屠殺が行われる。そのとき屠殺された血はたらいに盛られて、冷蔵保存し、各地に配送される。つまり神聖な場所の祭儀で使う祭物は血の神聖性が維持され、聖のものであるが、大量に屠殺される動物の血は世俗化される。そのため

屠殺の方法の変更（屠殺の場所、屠殺される量）によって、血食の様相も変化したといえる。

第二は材料と調理法の変化である。食品が開発され、食習慣で火を使用する（火食）ことになったように、血食にもこのような調理法の変化がみられる。元の血食は狩りを介して得られる血を生で食べていて、このような血の獲得について神に感謝する意味で捧げられた。それが調理方法の変化を介して日常のソンジグックやスンデなどに発展している。これらの過程は祭儀と日常で食べるものの比較でみられる。代表的な事例として、青陽で祭儀で使われた血は祭儀が完了したらムラに持ってきて、ソンジグックとして食べるのである。このソンジグックは一般的なソンジグックとは異なっている。まず、材料の側面から見ると、私達がレストランでよく食べるソンジグックの場合は味噌汁にソンジと野菜を入れて煮込んだものである。これはソンジを主な材料に使ったものではなく、補助材料として添加したものである。一方祭儀が終わって食べる血食の場合はこれとは違い、醤油で味付けして、ソンジだけ入れて沸騰させるというものである。これらの過程は前述したように「生き血の食→祭儀の食→日常の食」の過程で現れたと見られる。つまりソンジグックはヘジャングックとしての機能ではなく、生き血の食の保養から祭儀に捧げられて、それが一般的に受け入れられ、ソンジヘジャングックになったのである。

第三は共食の構造変化である。血の重要な意味は共同体で何かをまとめられる媒介体として存在することである。血は民族を団結させることができ、人々も家族として団結させることができる力を持っている。これらの血の象徴性は食品にも反映されると見ることができる。血の食物は前述したように、洞祭での共食と日常食におけるグックという共食のシステムを比較してみると、血が持っている意味が血の食物に反映されて現れるといえる。また神人共食という意味で、血は神に供物として捧げられた後、人間が飲福する。飲福は神からの贈り物とされ、洞祭の場合はムラの住民たちは血をグックとして共食する。グックは共食できる重要な調理方法で、日常の食事でもよくみられる。ソンジヘジャングックがまさにその例であり、過去に市場や港、居酒屋などでソンジヘジャングックがたくさん食べられるようになった。

このような変化の様相が原因となり、祭儀における血食が日常における血食に変化したとみられる。これは総体的に血の意味が祭儀から日常に収容されることによって、変化したものとすることができ、祭儀に現れた神聖な意味での血食が日常の食の単なる食材として血食の意味に変化したものといえる。

6. おわりに

これまで祭儀と日常で現れる血食の事例を中心に、その特徴と変化を調べてみた。以上の内容を通してみると、血食は様々な特徴を持っているといえる。

まず血食は供犠を介しての共食につながる。これは血食の血を得るために、動物が屠殺され、屠殺される過程で得られる必須の副産物として、このように採血された血は共食の方法としてのグックにつながられる。

次は血食を通して調理方法の変化を調べることで、簡素化から多様化に変化するプロセスが見てとれる。生き血食としての血食は祭儀に捧げる血を調理して食べるソンジグックにつながり、これはソンジヘジャングックをはじめとする様々な血の調理方法を通して日常につながる。

血食から血の意味の変化について、はじめにのところで明らかにしたように、血は様々な意味を持っている。このような意味が血食に反映され、血の神聖さを象徴する意味が単純な食材あるいは保養の意味に変化している。

本論文は2006年に韓国国立民俗博物館の『民俗学研究』18号に掲載された論文の日本語版である。

◆参考文献◆

1. 古文献と新聞記事

閨閣叢書

飲食知味方

社稷署儀軌

五洲衍文長箋散稿

東亜日報、1931年10月1日

ハンギョレ21、2003年3月26日

2. 調査報告書

国立文化財研究所、『黄海道の平山ソノルムグッ重要無形文化財第90号』、1998。

文化財管理局、『韓国民俗総合調査報告書郷土飲食篇』、1984年。

文化財管理局、『無形文化財の解説、黄海道平山ソノルムグッ』、1990年。

泰安郡泰安文化院、公州大学校博物館、『黄島鵬旗豊漁祭』、1996年。

3. 単行本

姜仁姫、『韓国食生活史』、三英社、1978年。

姜仁姫、『韓国食生活風俗』、三英社、1984年。

Gudrun Schury (ジャンヒェギョン訳)、『血の文化史』、イマゴ、2002年。

金尚寶、『朝鮮王朝 宮中儀軌飲食文化』、修學社、1995年。

金天浩、『地球村の食文化』、修學社、2002年。

マグォルロンツセンサマ (イ・ドクファン訳)、『食の歴史一上』、カササギグルバン、2002年。

尹瑞石、『韓国食品史研究』、新光出版社、1974年。

李盛雨、『韓国食品社会史』、教文社、1984年。

李盛雨、『韓国料理文化史』、教文社、1985年。

李盛雨、『韓国食品文化史』、教文社、1984年。

李盛雨、『東アジアの中の古代韓国食生活史研究』、郷文社、1992年。
任章赫、『雨乞いと地域社会』、ミンソクウォン、1999年。
張哲秀、『民俗学の体系的アプローチ』、ミンソクウォン、2000年。
周永河、『飲食戦争、文化戦争』、四季節、2000年。
崔吉城、『韓国民間信仰の研究』、啓明大学出版部、1989年。
フレイザー（イ・ヨンデ訳）、『金枝篇』、ハンギョレ新聞社、2003年。

4. 論文

金光億、「食糧の生産と文化の消費」、『韓国文化人類学』26集、1994年。
金義淑、「祈雨祭儀の象徴性」、『第18回民俗学大会発表要旨集』、1989
羅承晩、「大風船時代の渤海の長島縣の砦磯島漁民たちのイシモチの現地作業」、『図書文化』第23集、2004年。
任章赫、「済州道山岳信仰」、『山岳信仰Ⅲ』、国立文化財研究所、2000年。
任章赫、「韓国の肉食文化」、『文化財』33号、国立文化財研究所、2000年。
鄭惠京、「ソウルの食文化の研究」、『韓国の食文化協会』11集、1996年。
周永河、「キムチの文化人類学的研究」、漢陽大学文化人類学の修士論文、1994年。

注

- ¹ ここで言う動物体は人間と禽獣を含む、生物の上位概念である。
- ² 女性の血は不浄の意味を持っているが、現代では月経フェスティバルのように不浄の意味ではなく女性の権利として表現されることもある。
- ³ 血液型を通じて人々の性格を判断することは近年、様々な姿で現われる。たとえば、『B型の彼氏』という映画のように、血液型を介して人の性格まで見る現状やインターネットを介して血液型による心理分析をするなど、さまざまな血の姿が現れている。
- ⁴ 食用化と食品化は異なる概念である。食べられるようにするのが食用化で、食品化は食用化を通じて、人が食べることができる食品を作ることという。
- ⁵ 長い時間が過ぎても人々による祭祀を受けるほど徳がある聖人は「血食千秋道德君子」と呼ばれ、これを省略して「血食君子」という。この「血」は単に体の血を示すことばではなく、「祭祀に捧げる動物の供物」の意味である。
- ⁶ Blood; Blood is the drink of gods or the drink shared by mortals with gods. (Mirced Eliadeほか、“*Blood - The Encyclopedia of religion*”、1987.)
- ⁷ 雨乞いの「血」は祭壇や土地を汚すもので、血を洗うために雨を降らせるように働く媒介体である。
- ⁸ 女性の血はダルゴリ（生理）の血、出産の血に分けられる。このような女性の血は祭儀の神聖さを汚す不浄なものとして研究された。ダルゴリの女性や出産を控えた女性は祭儀に参加でき

ない。これは女性の血であり、「血不浄」意識があるので、祭儀の参加の制限する。

⁹ 血は赤い色の象徴で、恐怖の対象の病気、魔神、災害のような邪悪なオーラを退ける厄除けの意味がある。

¹⁰ 血の効用性に関して、漁村地域で使用する網に血を塗ると網を長く使用できることがある（羅承晩、『大風船時代の渤海の長島縣の碇磯島漁民たちのイシモチの現地作業』、『図書文化第23集』、2004年、125ページ）。

また『五洲衍文長箋散稿』には器が壊れたのを付けるときに血でくっつける例がある。（凡器什有罅有罅。盛水必漏。故製器者。以無罅固密爲期。舟破艙裂。製舟。艙以竹茹、弊綿。鍾罅塗血。鑄鍾有罅。以牛血塗之。）

¹¹ 周永河、『飲食戦争、文化戦争』、四季節、2000年、13～20ページ。

¹² 張哲秀、『韓国民俗学の体系的アプローチ』、民俗苑、2000、220～221ページ。

¹³ 牛は農耕に重要な役割をする動物なので、尊重され、古代エジプト、ローマ、インド、中国では古くから牛を農耕神の神聖獣と定め、牛を屠殺したり、肉を食べることを禁じた。

¹⁴ 任章赫、『韓国肉食文化』、『文化財』33号、国立文化財研究所、2000年、275～289ページ。

¹⁵ ここで言う血食体系とは血食する方法での食用法を言う。

¹⁶ 金義淑、『祈雨祭儀の象徴性』、第18回 民俗学大会 発表要旨集、韓国民俗学会、1989年、28ページ。

¹⁷ 春と秋に一回ずつ、冬至後三番目の戌日と臘日に行った。

¹⁸ 国に良くないことや良いことがあるときに行った。

¹⁹ イ・ゴンウン氏（男、65歳）、社稷大祭保存会長、2005年8月17日。

²⁰ 2005年9月4日社稷大祭の時に使われたモヒョルバン（毛血盤）。

²¹ 2005年9月3日社稷大祭の時に使われたくぼみの中のモヒョル（毛血）。

²² イ・ソング氏（男、74歳）、社稷大祭の供物担当者、2005年9月4日、筆者調査。

²³ 文化財管理局、『無形文化財解瑠 - 黄海道平山ソノルムグッ』、1990年、363～382ページ。

²⁴ 国立文化財研究所、『黄海道平山ソノルムグッ - 重要無形文化財第90号』、1998年、29～102ページ。

²⁵ 国立文化財研究所、『黄海道平山ソノルムグッ - 重要無形文化財第90号』、1998年、86ページ。

²⁶ 崔吉城、『韓国民間信仰の研究』、啓明大学出版部、1989年、189ページ。

²⁷ 血、皮、頭、前足、カルビ、肝臓、肺などの部位で、後ろ足は使用しない。

²⁸ オ・ヨンジョプ氏（男、58歳）、黄島鵬旗豊漁祭保存会長、2005年8月25日。

²⁹ ギム・オヨン氏（男、74歳）、2005年7月17日。

³⁰ ソンジ以外の祭物には肉もあるが、これは祭儀が終わってから食べる（飲福）方法とは少し異なる。ソンジは動物の魂が込められているので分けられないが、肉はこれとは異なり、分肉として、ムラの人々に分けて配ったり、外部の人たちに売ったりもする。これは血と肉が象徴する概念によって、肉は肉体を象徴して分肉をするが、血は精神を象徴し、魂が込められている

と考えられており、分血はしないのである。

³¹ 金光億、「飲食の生産と文化の消費：総論」、『韓国文化人類学』26集、1994年、17ページ。

³² ミョン・ナムシク氏（男、70歳）、2005年7月17日。

³³ 任章赫、「済州島の山岳信仰の特徴」、『済州島の山岳信仰 - 山岳信仰』、国立文化財研究所、2000年、273～274ページ。

³⁴ Gudrun Scbury（ジャン・ヒェギョン訳）、『血の文化史』、イマゴ、2002年、21ページ。

現在までも鬼を逐意識が施行されている南米だけでなく、エジプト、ペルシャ、ギリシャ、インド、さらには北方ゲルマン民族まで、多くの国で血を生け贄に使用している。

³⁵ ゴ・ソンチュン氏（男、54歳）、2005年8月23日。

³⁶ ボク・ジンボン氏（男、80歳）情報提供、2005年7月16日。

³⁷ フレイザー（J. Frazer）の『金枝篇』や人類学者の調査報告書によると、外国の事例にもみられる。

「アイヌ民族のクマ祭りにおいて、人々は時々熊の血を飲むことで、それが持つ勇気を自分たちに伝わるように願う。」（J. Frazer、『金枝篇』、ハンギョレ新聞社、2003年、609ページ。）

「アフリカの東部に住んでいる丈夫なマサイ族はエジプト人から受け継いだ長い角の牛を殺さず、喉に矢をさして血を採ってそのまま飲むか、穀物に混ぜて炊いて食べる。」（マゴールロンツェン-サマ（イ・ドクファン訳、『食の歴史 - 上』、カササギグルバン、2002年、133ページ。）

³⁸ ソンジの語源について、ギム・ハクミンは『ハンギョレ21』で（2003年3月26日）記事で次のように述べている。

「今は消えた満州語であるが、満洲語センジ（senggi）が血を意味し、センジが韓国に入ってから獣の血を指す言葉であるソンジになった」

³⁹ ホン・スギョン氏（女、82歳）、麻浦ヘジャングック店、2005年6月19日。

⁴⁰ 李盛雨、『韓国類理文化史』、教文社、1985年、122ページ。

⁴¹ 文化財管理局、『韓国民俗総合調査報告書 郷土飲食篇』、1984。

⁴² 李盛雨、『韓国類理文化史』、教文社、1985年、117ページ。

⁴³ 供犠とは犠牲をして貢献するという意味で、祭礼に不可欠の条件として作用する。供物を準備するために動物を生かしたり、殺して上げるが、このように犠牲が随伴された祭礼に上げるものが供犠である。

⁴⁴ 共食体系は一緒に食べることができる一定の組織で、グックは韓国の食生活で共食を代表する食べ物である。これはチゲのように少量を沸かして少人数で食べるものとは異なり、多くの量を沸かして分けて食べる。